

2022年度の金沢星稜大学地域連携活動の総括

2022年度は、新型コロナ禍も3年目を迎え、「ポストコロナ時代」への模索が続きました。ワクチン接種やオミクロン株への変異もあって、ようやく終息の兆しというか、「非常事態」を抜け出す端緒がみえつつも、まだまだ不安も残り、手探り状態のなかそれぞれの活動を推し進めてきた一年ではなかったかと思えます。

とくに、本来活動が活発化する夏場に大きな感染の波があり、年を超えても規制緩和の影響が大きな山が生じて、活動のまとめの段階でもいろいろ困難があったことでしょう。この間、学校・企業の取り組み姿勢、医療・介護施設の現状、若者と高齢者のリスク意識の差から、国民各層、それぞれの地域での認識や対応の違いも明らかになってきました。こうした背景もあり、ゼミやサークルを中心とした地域連携、地域貢献活動や大学間連携による地域連携の取り組み、自治体等との連携協定等に基づく地域連携促進事業にも、個々の判断を求められる場面が多く、活動の実際にも影響があったものと思えます。

とはいえ、感染の波を掻い潜りつつ、本センター主管事業に限っても、学生の自主的な地域活動にかかわる「星稜ジャンプ地域活動プロジェクト」(ちいプロ)は7団体、ゼミ活動を中心とした「地域連携による地域貢献活動」推進事業は6団体が、継続的な活動を試みました。それぞれの場面で、地域住民のみなさまには、学生・教職員に多大なご協力をいただいたことと存じます。自治体や企業等の関係団体、地域住民のみなさまには、改めて感謝の意を表すものです。

上記事業に限らず、個々の団体においては、オンライン等を活用しながら感染防止対策を徹底し、さまざまナリスクを創意工夫で乗り越え、今年度の活動を進められてきたことと思えます。そうした工夫や努力の経験を共有できる機会としても、本報告書が今後の活動の具体的な参考になり、意義あるものになるよう期待しております。

今日、地域の私学においても、情報通信技術の一層の発展、(安全保障問題を含む)グローバル環境の激変、さらには、SDGsへの取り組みといった社会の大きな変化を踏まえずには、その使命は果たせません。この間の経験を踏まえつつ、新たな環境における活動方法の模索や知恵と工夫の蓄積が、今後の実りある活動につながるものと信じております。

しばしば引かれるように、本学の「大学憲章」には、「「地域とともに歩む大学」として、地域社会の課題解決に努め、着実な研究成果を地域社会に還元する」とあります。そうした意味でも、地域社会の課題を認識する力と大学ならではの社会還元の方法を探っていくはなりません。

「ポストコロナ」時代の社会に、少しでも「役に立つ」大学として、とりわけ地域活動と地域研究の両輪で地域連携の試みを進めてまいります。今後とも一層のご指導・ご協力をよろしくお願いいたします。

2023年3月

金沢星稜大学地域連携センター長
本康宏史